

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金楨薫

本論文「横光文学における「嘘」のエクリチュール——第四人称成立への表現史的道程及びその意義」は、横光利一（1898－1947）の文学作品における「嘘」の問題を分析したものである。そこには2つの要素、「嘘」について書くという問題と、「嘘」のように書くという問題とが存在している。金楨薫氏はその2つの問題を連関するものとして扱い、分析している。その観点は、横光利一が作り上げた作品において、あれほど多くの「嘘」についての言及があるにもかかわらず、横光利一作品を「嘘」というキーワードで精細に分析した先行研究がなかったという判断から選び取られた。そしてまた本論では「嘘」と「虚構」との違い、「嘘」と「四人称」との関係が吟味されている。

以下、論文の構成に即して、論文の内容を説明する。本論文は「はじめに」で始まり、それに引き続いて第1章「「嘘」のエクリチュールの成立」、第2章「文学の現実と文字の現実」、第3章「様々なる「嘘」の生成形式」、第4章「四人称の成立に至るまで」、第5章「四人称のスタイル及びその行方」、そして「結び」で終わるという構成を取っている。「はじめに」では、横光の文学的言説の中で「嘘」という問題がいかに重要であるかが概説される。それをうけて、第1章では横光利一が「話すように書く」のではなく、「書くように書く」という立場をとった理由とその背景とが議論される。その際、横光と夏目漱石、ロシア・フォルマリストのヴィクトル・シクロフスキー、そしてポール・ヴァレリーとの関連が議論される。第2章では、横光が「嘘のように書く」際、いかなる文学的技法が使われたかが跡付けられる。その時、前景化される文学的技法は「象徴」と「比喩」である。第2章第2節「現実の〈場〉と〈場〉の現実」では、『上海』を題材として、そこで描かれたテキスト空間が分析されている。そこには「風呂場」「踊場」「工場」といった可視的な場と「市場」「相場」といった非可視的な場とが存在しているが、それぞれが言語空間としての「上海」を表象していると氏は論じる。また横光が多用する直喩について、横光がどのような批評的言説を残しているかが、同章第3節「文学的騒音としての形容詞」で議論される。第3章では、横光が作品の中で「嘘」を描いたことの意味が分析される。その作業は、横光において「嘘について書く」ことが「嘘のように書く」という形式的方法と密接な関係があることを示すことになった。また、作品中で嘘を描くことは、「嘘」について発話する登場人物の視点、語り手の視点、作品に内在する作者の視点という視点の絡まり

とも連動することが明らかとなった。

第4章は、そうした議論の展開を受けて、横光文学において四人称がいかにかに成立したかの分析となる。まず、横光が「新感覚派」から「新心理主義」に移行した時、彼が主張した「真理主義」の内容の吟味が行われる。横光がたえず「嘘」を重視してきた立場を考えると「真理」を標榜することはこれまでの彼の立場と齟齬をきたすことになるのではないかという疑問が生ずるが、金氏は横光においてその二つは連動していたと結論付ける。人の心理（真理）には必ず二つ以上の心理が存在し、それを小説では同時に描けない以上、小説は必然的に嘘とならざるをえないと横光は主張するからだ。その観点から、一体、横光はいかに「嘘」としての心理を描いたかという問題が分析される。ここの作品分析は本論文の最も優れた部分となっている。横光の新心理主義文学時代を代表する『機械』（単行本、創元社、1935年刊）を取り上げ、そこに収録してある作品の文体分析をすることで、横光の心理分析の特徴を明らかにしている。特にそこでの横光の副詞の使用によって示される、登場人物の心理変化の描写は、これまでの研究に指摘されたことのないものであり、文体分析研究においても、また横光文学研究においても新しい局面を開いたものとして評価できる。そこから横光の提唱する四人称が実体というよりは、いくつかの心理の間に存在する概念であり、実体的でありながら、同時に架空的なものとして捉えられていたことが分かる。その特徴は横光が「嘘」について考えていたことと共鳴しているのである。第5章では「純粋小説論」で提起された四人称が具体的にどのような表現として結実しているかが確認される。また「嘘」と四人称とがどのように関連しているかが「偶然性」という概念によって説明されている。「結び」においてはそれまでの氏の議論がまとめられ、より大きな文脈に位置づけられている。

以上でわかるように、金楨薫氏の本論文は、氏が韓国外国語大学校在学中から行ってきた横光利一文学研究の文体分析、形式分析からのまとめとなった。これまで氏が横光文学を丹念に読み込んできた成果がここにはよく現れた。先行研究もよく調査されており、審査員から賞賛を受けた。しかし、「嘘」を書くことと、「嘘」のように書くことの連関性、それと「偶然性」との関連はまだよくつめられてはおらず、さらなる分析が必要であるというのは審査委員の一致した見解であった。これは金楨薫氏のこれからの課題となるであろう。そうした問題点があることは否定しえないにしても、本論文は課程博士論文としての水準を優に越えていることは明らかである。

したがって本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。